

いわき湯本病院

症 例 概 要 患者氏名：S.T.様（70代・女性）

病名：右乳がん、術後多発肺転移、多発骨転移、右大腿骨病的骨折

入院期間：令和2年1月中旬～令和2年3月上旬

経過：進行乳がん術後2年目、肺および全身多発骨転移が出現、さらに大腿骨病的骨折を発症。ご本人の希望もあり積極的に骨折治療および化学療法が進められた。骨折手術後の経過観察、抗がん剤治療の副作用等の為廃用が進行し、食欲、気力も低下、これ以上の積極的治療を断念。長期療養観察を目的に当院に紹介された。

入院後、ご家族の希望もあり、病的再骨折誘発の懸念もあったが、可能な限りのADL向上を図り在宅療養を目標にケアを開始した。結果、術後荷重が困難でできなかった立位も、ベッドサイド立位までは可能となり、ポータブルトイレの使用もできるようになって、気力も向上、食欲も出て、困難とされていた在宅療養が可能になりご本人・ご家族に大変喜ばれた症例。

内 容

2017年1月（当院入院3年前）右乳がん（StageⅢA）の診断。術前化学療法の後腋窩リンパ節郭清を含む根治的乳房全摘術が施行され、術後放射線+化学療法が追加された。

術後2年目2019年8月、多発肺転移と多発骨転移が指摘され、精査の結果、骨転移は胸椎病的圧迫骨折のほか左鎖骨、肩甲骨、腸骨、右大腿骨に及んでいた。化学療法のほか内分泌治療も追加し積極的治療が進められたが、骨転移診断三ヶ月後（2019年12月）夜間自宅で歩行中にとくに誘引なく右大腿の激痛あり右大腿骨骨幹部骨折を発症。整形外科で疼痛軽減のため髓内釘による観血的整復固定術が施行された。

術後、骨折部免荷のためのベッド上安静が続き、これに強力な抗がん剤治療に伴う副作用が加わって、急速に廃用が進行、食欲、気力減退、白血球数減少などによりご家族、ご本人の希望はあるものの積極的治療は断念され、在宅療養復帰は不可能との判断で、長期療養のため当院に紹介され転院した。

転院時のFIMは、運動項目16点、認知項目22点合計55点で食事摂取量も50%程度であった。来院後の整形外科診察の結果立位訓練も注意しながら可能との判断で徐々に開始することとした。慎重に進めた訓練の結果、入院24病日には運動項目48点、認知項目22点合計70点となり、急激な運動能力の改善が見られた。その後50病日には運動項目55点、認知項目26点合計80点となった。移乗に介助は要するもののベッドサイドのポータブルトイレの使用も可能になって在宅復帰を諦めていたご本人の

意欲も向上し、食事も全量が摂取できるようになった。ご家族も大変喜んで入院58日目、退院し在宅療養に復帰できた。

進行癌末期の状態でのケアは患者さんご本人の心のケアを含め大変重要である。本症例の結果は、急性期担当の外科、整形外科チームと長期療養担当の医療チームとの緊密な連携で患者さんおよびご家族の希望の実現が達成されたものであり、今後の診療に大いに参考になる症例であったと思われる。